

ITI Scholar NEWS

vol.10 (2023, July)

ITI Section Japan



ITI スカラー通信第 10 号をお届けします

今回の通信では、2022 年 9 月より Zurich 大学にて開始されました東京医科歯科大学大学院歯周病学分野ご出身の福場駿介先生からのレポートとなります。

5 月にリスボンで開催されました ITI Consensus Conference の様子を中心にご報告いただきます。
よろしくお願い申し上げます。

福場駿介先生

University of Zurich

(Zurich, Switzerland)

スイスのチューリッヒ大学に留学中の福場駿介と申します。留学期間もあと3ヶ月となり、いよいよラストパートといったところです。ようやく待ちに待った夏が訪れ、気持ちの良い気候を楽しんでおります。

今回は5月にポルトガルのリスボンで開催された the 7th ITI Consensus Conference の内容を中心にお伝えします。

私は今回初めて参加となりましたが、ITI Consensus Conference は5年ごとに行われ、今回が第7回目となります。この会議では、インプラント歯学の特に明確な合意が得られていない領域に関するトピックが取り上げられ、最新の文献や科学的根拠に基づいて ITI による Consensus Statement と Clinical recommendation が作成され、臨床医に治療ガイドラインとして提供することを目的としています。今回は Surgical techniques、Technology、Oral medicine、Patient benefits、Implant placement and loading protocols という5つのトピックが議論されました。トピックの選定は約2年前から行われ、研究者と臨床医の選任、彼らによる Systematic review & Meta analysis が実施され、本大会に先立ち、13本の論文が準備されていました。3日間にわたる90名以上の ITI フェローによる討論の結果、Consensus Statement と Clinical recommendation が作成され、最終日の Annual meeting で、各グループからその内容が発表されました。Annual Conference は誰でも参加できますが、Consensus Conference は招待制であり、全ての ITI フェローが参加できるわけではありません。私たちの医局からは9名ほどが参加し、一緒に同行することができました。

また今年度同じように ITI Scholar として世界中に存在している ITI Scholarship center に留学しているおよそ20名の Scholar たちや、彼らを指導している著名な指導医たちとランチをする機会があり、それぞれの留学先での近況を含めて交流することができました。すでにヨーロッパに留学されている Scholar たちとは他の学会やイベントなどで会う機会がありましたが、アメリカや南米などに留学されている Scholar たちとは初めて直接会うことができ、親睦を深めることができました。やはり国が違えば、行われていることも多かれ少なかれ違いがあるようで、情報交換することができ、大変有意義な時間となりました。

夜には ITI AGM Dinner が開催されセレモニーの中で、留学先の前主任教授である Christoph Hämmerle 教授や、勝山英明先生が Honorary ITI Fellow（名誉フェロー）として表彰されました。また船越栄次先生が ITI Board Member の 8 年間の功績を讃えられ、表彰が行われました。

ITI の中でも歴史のある André Schroeder Research Prize の表彰式も行われ、前臨床研究部門では Dr.Dorien Van Hede が、臨床研究部門では Dr.Andrea Rocuzzo が受賞していました。



Christoph Hämmerle 教授



勝山英明先生



船越栄次先生



ITI Consensus Conference の様子

さて今回の ITI Consensus Conference の具体的内容に触れてみたいと思います。
各グループでは、以下の内容が議論されました。

Surgical techniques グループでは、インプラント周囲の最低限必要な頬側骨幅や軟組織増大術の長期的な有効性などについて話し合われました。

Technology グループでは、積層造形法とミリング法によるインプラント補綴物の特徴の違いやアバットメントの選択基準、インプラントを用いた臼歯部複数歯欠損の咬合再建におけるインプラント本数や材料選択について議論が行われました。

Oral medicine グループでは、チタンインプラントとジルコニアインプラントのインプラント周囲組織への影響の違いや、骨吸収抑制薬服用患者に対するインプラント治療の議論が行われました。

Patient benefits グループでは、無歯顎患者に対する総義歯、インプラントオーバーデンチャー、インプラントサポート固定性補綴物などの治療法における患者満足度や口腔機能改善、顎堤吸収量の違いなどが話し合われました。

Implant placement and loading protocols グループでは、抜歯直後のインプラント埋入や即時荷重の適応症と有効性、留意事項などについて討論されました。過去に ITI Scholar としてカナダのトロント大学へ留学経験されていた武田侑大先生が、ITI Reporter として、大会中の Group 3 Oral Medicine の様子をさまざまなメディアを通してレポートされていました。これらの Consensus の内容は、必ずしも新しい発見ばかりではありませんが、これまでの知見や知識を整理することができました。

また、今後の研究が必要なトピックやグレーゾーンも明確になり、ブレインストーミングにもなりました。the 7th ITI Consensus でまとめられた内容は、今後、学術誌の Clinical oral implant research で順次公開される予定ですので、是非目を通してください。



Surgical techniques のメンバー



Technology のメンバー



Oral medicine のメンバー



Patient benefits のメンバー



Implant placement and loading protocols のメンバー

インプラント歯学をリードする研究者、臨床医が3日間、会場に詰めかけて、活発に議論の上、こうした Consensus Conference や Clinical recommendation を作成している裏側を垣間見ることができました。また、それらが非常に体系化されていることに驚かされました。日本のさまざまな学術団体でも、臨床ガイドラインの制定などが定期的に行われており、やはり定期的にこのように科学的根拠と臨床応用のアップデートを歯科医学の歩みとして積み重ねていくことは非常に重要だと感じました。

Consensus Conference に参加していた同僚たちは、そのハードなスケジュールに疲れてきている様子でしたが、同時に世界中の仲間たちと再会し、チームとしてやり遂げたことへの充実感、達成感を感じているようでした。日本からも ITI Japan リーダーシップを中心におよそ 20 名程度の先生方が参加されていました。インプラント治療に関する学術団体としては世界最大規模である ITI のスケールの大きさを目の当たりにし、そのリーダーシップと熱量、そして ITI family の結束を肌で感じる事ができた 1 週間でした。



Annual meeting での Charlotte Stilwell 先生 (ITI President)

次回で最終回になると思いますが、ITI スカラーとして得た経験の総括として、この 1 年間で皆様と一緒に振り返ることができればと思います。



今年度の ITI Scholar たちとのランチ



今年度の ITI Scholar たちとの集合写真



チューリヒ大学のメンバーとの集合写真

ありがとうございました。

